

全書研会報



「令和」に思う — 期待と課題 —
会長 加藤 祐司

昨年五月に、令和と改元され、一年間が経とうとしています。

全日本書写書道教育研究会は、今年で創設以来六十年という節目の年を迎えます。改元と共に新しい令和の時代に生まれ変わった「新生全書研」の気持ちで、「令和」の心を大切に、書写書道教育の更なる活性化と充実発展を願ってやみません。

さて、本年四月から、小学校において、新しい学習指導要領が全面実施されます。中学校は同三年度から、高等学校は同四年度から学年進行で実施の予定です。

この全面実施を踏まえ「新学習指導要領」から読み取れる基本的な考え方を中心に、これからの国語科「書写」と芸術科「書道」の方向性（期待と課題）について考えてみましょう。

新しい学習指導要領では、小学校一・二年生の国語科「書写」の内容に「水書用筆等」を使用した運筆指導が取り入れられることや、中学校三年生の「書写」の指

導事項に「身の回りの多様な表現を通して文字文化の豊かさに触れ、効果的に文字を書くこと」等が明示されました。

この「文字文化の豊かさに触れ」は、「文字を学ぶ」から「文字から学ぶ」への視点の転換が明確に求められています。

また、高等学校芸術科「書道Ⅰ」においても、「書道能力の向上」「書写の伝統と文化の意味や価値」などが明記され、そしてさらには必修科目として「現代の国語」（書写能力を社会・実生活に生かすこと）と「言語文化」古典の作品や書体等との関わりから多様な文字文化への理解を深めることが、新設（各々二単位）されたことは特筆すべき事でしょう。

これらを踏まえ、これからは、授業改善の視点として「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）を積極的に取り入れることで、これからの「書写」「書道」教育のあるべき姿を求めています。具体的には、まず第一に教

発行所
全日本書写書道教育研究会
〒106-0047 東京都港区
南麻布3～9～33
港区立本村小学校内
発行人 長野 秀章
広報部長 佐藤 美緒
印刷責任 (株) 文書館
☎ 03(3918)5351

の改善も必要となります。高等学校「書道Ⅰ」における「漢字仮名交じりの書」の学習では、導入段階で「はじめに古典ありき」をひとまず脇に置いて、生徒たち自身が、能動的・主体的に、五感を働かせて、書くこと（表現）の楽しさを味わう授業づくりを計画することも一考でしょう。

例えば、「漢字の書」や「仮名の書」では「基礎から積み上げる学び」が主流でしたが、「漢字仮名交じりの書」では従来の順序性に捉われない発想の転換で、まずもって、好きな言葉（文章）を書かせてみる。その次に生徒がどのような雰囲気での表現を目指しているのか、よりよい表現にするためには、どのような古典や古筆の学習が必要なのかを、生徒自身のつばやきと、生徒同志の対話や教師の助言等を踏まえて、表現活動を進めていくという在り方も一つの方法として如何でしょうか。

次に、学習意欲や態度、能力、豊かな人間性までを主体的・協働的に身に付けるために、従来の「授業計画」→「授業実践」→「学習の実現状況の把握」→「授業改善」という、いわゆるPDCAサイクルに、文字文化（ことば・文化）を中心とした要素や文字から学ぶ要素をいかに取り入れて改善していくかなどが課題となります。

更には、文字文化、指導内容、指導法を含めて、小・中学校間や中・高等学校間のカリキュラムをめぐる問題があります。カリキュラムの一貫性は一般的に大きく「連続性」と「適時性」の二つの軸から捉えられますが、この軸に照らしてみますと、これまでは、「適時性」に傾斜して捉え、小学校ならではの書写教育、中学校らしい書写教育、高校の書道教育に目を奪われ、教科等横断的な学習の「連続性」に強く目を向けてこなかったことへの反省を踏まえて

第60回全書研東京大会報告

令和元年九月十二日・十三日

『書字文化をはぐくむ 書写書道教育』

祝辞

文部科学省初等中等教育局課程課教科調査官
豊 口 和 士 先生

全日本書写書道教育研究会第60回全国大会東京での開催、誠にありがとうございます。災害により今なお不自由な状況にある皆様にご心よりお見舞い申し上げます。

昨年度、北海道大会が北海道胆振東部地震により中止となりました。震災に遭われた皆様の一日も早い復興をお祈り申し上げます。本年度大会紀要には北海道大会の提案内容が掲載されています。新学習指導要領での確かな学びが示されており、大変充実したものとなっております。大会中止が残念ではありません。本年度大会紀要のご活用を期待するところです。

さて、大幅に全面改訂された学習指導要領による新しい学校教育が来年度から小学校を皮切りに始まります。そうした中、昨年度に引き続き、本大会は大変重要なタイミングでの大会となります。研究協議が充実したものとなるよう期待します。

全書研は、各校種が一体となって全国規模で取り組んでいます。新たな指導内容となる水書用筆を使用した運筆指導への迅速な対応など、未来を見据えた精力的で前向きな取組に感謝と敬意を表したいと思えます。以上、簡単ではございますが、祝辞といたします。

東京都教職員研修センター研修部専門向上課
柴 田 貴 志 指導主事



全日本書写書道教育研究会東京大会の開催にあたり、東京都教育委員会を代表してご挨拶とお祝い

を申し上げます。本研究会が六十年の大きな節目を迎えましたことに、重ねてお祝いを申し上げます。

子供たちは、生活の中で文字を書く機会が減少する傾向にあり、学校教育では、我が国の豊かな文字文化を理解し継承、創造する力の育成が求められています。今回の学習指導要領の改訂における書道教育の中でも本研究会は、小学校で、毛筆と硬筆の関連的な指導の工夫として低学年での水書用筆等を使用した指導を積極的に取り組み、学習指導要領に取り入れられたことは、本研究会の実践を価値付けるものです。今年度も、本研究会と東京都教職員研修センターとの連携研修を行い、水書用筆の指導について研修しました。

本日、大会の開催にご尽力いただいた皆様にお礼申し上げますとともに、本研究会の今後のますますのご発展を祈念しております。

葛飾区教育委員会
加藤 憲 司 指導室長



全日本書写書道教育研究会全国大会がこのように盛大に開催されますことをお祝いするとともに、全国各地からこの東京都葛飾区にいらした皆様を心から歓迎し、お祝いの言葉を申し上げます。

現在、ICTの普及やAIの進展、グローバル化が激しい現代社

会だからこそ、文字文化を大切にすることを育み確かな書写力の重要性が高まっています。実生活の中で文字を書く機会が大人も含めて減っているところです。今こそ文字文化を重視した環境が必要とされます。本研究会が書写の授業において、書写を専門にしない教員でも子供たちが主体的に学ぶことができるような研究を進めていることは、書写教育の充実発展につながります。本大会を契機として我が国の書写書道教育の更なる活性化と充実を図っていただきますよう、心より期待しています。

部科学省はじめ東京都教育委員会、葛飾区教育委員会関係諸機関の皆様のお陰と心より厚く御礼申し上げます。中でも公開授業、研究分科会では、小学校の学習指導要領の完全実施を目前に控え会場全体の雰囲気はもとより、全国の先生方のご意見やご質問等による意見交換の場でもことのほか熱気に満ちており、主催者の一人として開催できたことの意義を強く感じる事ができました。第六十回大会ということで第五十回大会からの十年間で本会の充実、発展にご功績があった方々に感謝状を贈呈することもでき、また昨年（第五十九回全国大会（北海道））につきましてはご承知の通り、北海道胆振東部地震により急遽中止となり全書研本部が中心となって義援金を集めさせていただき、お陰様で高谷大会運営委員長にお渡しすることができました。ご協力いただきましたました会員の皆様に改めて厚く御礼を申し上げます。

大会の開催 御礼について

大会長挨拶
長 野 秀 章



全日本書写書道教育研究会の第六十回全国大会（東京）が令和元年九月十二、十三日の二日間東京の下町葛飾区立中青戸小学校で開催され、都内はもとより全国の小学校から大学までの書写・書道教育関係者、さらに書道教室の指導者、書壇の先生方や筆墨業者が一堂に会し、まさに、オールジャパンの様相で盛大裡に終了することができました。これも偏に文

字形指導から運筆指導という、文字を書く過程にスポットを当てたまさに書写教育の新しい時代がスタートします。全書研と致しましてもこの大切な時期にこの度の教育課程の理念を生かした実践的研究を一層充実すべく本部はもとより全国の会員の先生方と気持ちを一つにして邁進する所存でございますので今後共にご指導ご協力の程をお願いする次第です。

分科会

低 学 年

■報告者

江東区立東雲小学校

前川 裕希主任教諭

一年生

■研究発表

【単元】

にている ひらがな「ひらがな」

【発表者】

江戸川区立第四葛西小学校

濱田 まや主任教諭

【授業概要】

低学年では、文字を整えて書くために必要となる基準、書くときの姿勢や筆記具の持ち方、筆順といった基礎、基本を学習することに重きがおかれている。今回の学習指導要領改定では、小学校低学年において、「点画の書き方や文字の形に注意しながら」書くことの指導について、適切に運筆する能力につながるよう、指導を工夫することが示されている。そこで、水書用筆等を使用した運筆指導を

取り入れる授業を行った。

二年生

■研究発表

【単元】「題材」

はらいのほうこう「かん字の書き方」

【発表者】

西東京市立谷戸小学校

田邊 佳代子主任教諭

【授業概要】

本単元では、水書用筆等を用いて練習する時間を設定し、払い徐々に力を抜いていく送筆や最後を止めずに払う終筆の感覚を身に付けることができるようにした。また、画の方向にはいろいろな向きがあり、適切な方向でなければ、その文字は正しく認識されない場合があることを理解させることで、日常的に文字を丁寧に書くように指導した。



■研究協議

○司会

葛飾区立中青戸小学校

米澤 知子主任教諭

○記録

葛飾区立中青戸小学校

奥村 麻美主任教諭

○助言者

横浜国立大学

青山 浩之教授

【分科発表】

低学年分科会を目指す児童像
「書写で身に付けた力を、日常生活に生かすことのできる児童」を念頭に、次の点を四つの視点で授業を行った。

①硬筆書写の能力を高める工夫
姿勢や持ち方、点画の書き方の音声化、水書用筆、水書用紙、ソフト下敷きを使用する。

②自分のためあてをもち、楽しく取り組む学習過程

・筆順の確認を空書きで行う。
・水書用筆を活用し、学習意欲を高める。

・分解文字、拡大文字を活用する。
・自分の課題に気付かせる。

・課題解決に向けた主体的な学習が行えるようにする。

③日常の手書き文字に生かす工夫
文字環境を整えたり、目的意識や相手意識をもって書くことと意識させたりする。また、学習したことを日常的に意識できるようにしたり、本時の学習を生かした似ている平仮名を探したり、同じ点画の文字を探したりする。

④学習意欲につながる評価の工夫
試し書きとまとめ書きを比較したり、自己評価・相互評価を行ったりする。また、机間指導で助言や称賛を行う。

【自評・一年授業者】
一つのマスの中を四つの部屋に分けて、マスの中の字を見ることが子供が基準と比べて気付くことは多かった。さらに子供自身が説明することができるようになるために、書写用語を自然に使えるようになってほしいと感じた。

・自己修正の場面では、学級全体で焦点化し、赤丸を付けた。これから自分の字を見て考えていくための、最初の一步であった。

【自評・二年授業者】

文字分析より、払いが苦手であることが分かり、水書用筆を活用する授業とした。水書用紙と、ソフト下敷き+プリントの入れ替えや、水書用筆、鉛筆、赤鉛筆の持ち替えなど器用にできる子もいたが、積み重ねが必要であると感じた。

【質疑応答】

・水書用紙の文字の大きさやマスの活用などは、検討したのか。

・鉛筆の持ち方について、手首を動かしていた児童がいた。水書用紙に書くとき、右から書き始めると手が汚れてしまうと思う。水書用筆が目的になってしまっていないか。

■指導・講評

水書用筆をどう活用するか、示してくれた授業であった。各学級の実態を把握し、指導案にも必要なことはきちんと記載され、しっかり研究していることが伺えた。指導要領の改訂に伴い、四月からの水書用筆への注目は高い。運筆の習得から書字の過程が重要となり、学び方を重視しなければならぬ。書写の目的は、「生活に生かすこと」である。持ち方、筆圧の強弱、滑らかな線が書けているか。また、左手の置く位置もきちんと指導していかなければならない。

【研究発表】

テーマ(研究主題)

書写の能力を高め、日常に生かす学習指導の工夫

発表者

葛飾区立南綾瀬小学校

松川 浩一郎教諭

世田谷区松丘小学校

栗林 扶海代主任教諭

【授業概要】

三年生

筆圧の変化を体感させながら様々な太さの点画を書く活動を行った。筆を立てた場合と筆を寝かせた場合とでは太さはどう変化するのか、穂先の筆圧を弱く接した場合と穂先の筆圧を強く接した場合とを書き比べ、力の入れ具合や筆の立たせ方について話し合った。

四年生

漢字どうしの大きさについて自分たちできまりを見付け、そのきまりから自分の課題を見付け、練習する活動を行った。同じ大きさで書かれた熟語ときまりに基づいて書かれた熟語を見比べ、その相違点や共通点を見付け、きまりについて話し合った。きまりを確認してから試し書きと基準文字を比較し、自分の課題を赤ペンで書き込むことで課題を明確にさせた。

【研究協議】

司会

府中市立新町小学校

阿部 茜教諭 記録

記録

国分寺市立第三小学校

藤原 あゆこ教諭

助言者

葛飾区立洪江小学校

並木 玲子校長

(自評)

三年 松川 浩一郎教諭

「筆圧」を意識させた授業を組み立てた。硬筆ではなかなか体感できない。
・毛筆と硬筆の違いを体感する時間を多くとる。
・軸を立てて書く、「軸を寝かせて書く」の違いを体感させる。
・筆圧のかけ方を変えると太さが変わることがわかる授業。
・本来は「払い」を筆圧の変化をもたせて書かせていく。
・子供の中で課題を感じられる授業展開にする。

四年

栗林 扶海代教諭

「もっと上手になりたい」という気持ちをもっている児童が多くいたが、文字には原理原則があり、それに気を付けて書くことで文字が整うということに気付いていない児童がほとんどだった。そのため自分たちで「きまり」を見つけて活動を行った。
・「同じ大きさに書いた方がバランスが良い。」「小さく書くより同じ幅で書いたほうが良い。」などの感じ方もあった。普段活字を見る機会が多いことが影響しているのか、「画数の少ない文字は小さめに、画数の多い文字は大きめに。」というきまりには、なかなかたどりつけなかった。「バランスがよい」という感覚についても議論し合い、明確に押さえられると良かった。

(協議)

・文字の大きさについて自ら課題を見つけたり課題文字からきまりを見付けたり「画数が少ない文字を小さくする」というきまりを見付けるのは難しかった。画数の多い文字が上にある言葉を示して、上下の大きさの関係を比べさせても良かった。
・姿勢については、日々の指導の中で、「足はペタン、背筋はピン、おなかと背中がグー」という姿勢を整える合言葉を定着させ、日常的に指導していくと効果的である。

・筆圧指導については、筆圧のかけかたをイメージしやすくするため、穂先は十時半の位置から四時半の方向へ進みながら筆をおろしていくという指導を行った。
・四年生の授業は、相違点が三種あり、(左右) 上下の大きさ、画数の多い、少ない)を見付けるのは難しかった。
・子供は全体の形を見て判断するので、上下の字の大きさから「画数の少ない字は小さく書き、画数の多い字は大きく書く。」というきまりを見付けるのは難しい。
・文字の大小について、学んだことを自分の苗字や名前など、身近な言葉にフィードバックできると日常に生かすことができる。

(指導講評)

・新学習指導要領全面実施によって、低学年に水書用筆が導入されることに比べると、中学年ではそれほど大きな変化はないが、点画の

中 学 年

書き方への理解を深めるためにも毛筆の学習を進めたり、硬筆をより日常へ生かすための毛筆指導と なっている。

・学習指導要領「ウ 書字に関する次の事項を理解し、使うこと」からも学習者自身が理解し、正しく用具を使っていくこと、それを指導者は最後まで見届けることが大切である。

三年生

・フェルトペン、鉛筆、毛筆を書き比べ、体感し、違いを実感する。
・点、画の変化は、筆圧を変えようと線が変わることを実感することが大切である。

・自分が書いたことを確かめるために話し合いをする。その際は、書写の用語を使うことを条件付けて話し合わせるとうい。

・どうやったら太い線が書けるか子供たちは工夫して書いていた。

・寝かせて書く(側筆)のは難しい。

・もう少しワークシートに自由度があっても良かった。また、子供が自由に太い線、細い線の練習する時間も確保したほうが良い。

四年生

・文字からさまりを見付けられる際は、一貫してめあてに立ち返らせていたのが良かった。

・活字を見る機会が多いので、文字のバランスが捉えづらくなっている。文字環境を整えておくことが大切である。

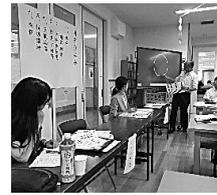
・「画数が少ない字を小さく書く」というさまりが見つかりにくかった。

・書写は、話し合ったことを再度書いて確かめられるところが良い。

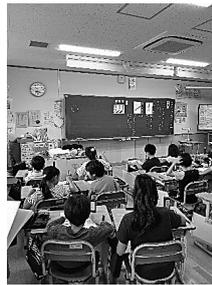
・言語活動を充実させる。そのためには、書写の言葉を使って相互評価をさせる。

・書写過程を見合う。その際には、ICT機器を活用し、カメラで一回目の時とアドバイスを受けた後に書いた字を撮影し、変容を確認する。

協議会



三年生



四年生



高 学 年

報告者

杉並区立四宮小学校

小林健一郎主任教諭

五年生

■研究発表

【単元】

読みやすい紙面構成を考えよう
「筆記具の選たく」

【発表者】

足立区立平野小学校

渡辺 梨沙主任教諭

【授業概要】

高学年の児童は、手紙や文集、ポスターなど、人に見られる文字を書く機会が多くあるため、相手意識をもち、読みやすい文字を書くことを意識することが課題である。そこで、本のポップを書く活動を通して、読みやすい文字の大きさや大きさはどのようなものなのかを理解する授業を行った。国語科「十年の釘にいとむ(内藤誠吾)」を共通教材とし、本のポップに書く内容(題名、作者名、内容や推薦文、キャッチコピー)も統一することで、表現したい文字の大きさや太さを出すためにはどの筆記具を選択したらよいかを各自が考え、知識と技能を高めていく授業を行った。



六年生

■研究発表

【単元】「題材」

効率のよい書き方のリズムを身につけよう
「ほ先の動きと点画のつながり」
「あけび」

【発表者】

品川区立日野学園

古谷野 弘美教諭

【授業概要】

本単元では、毛筆を使用して、穂先の動きと点画のつながりに気を付けて書くことができるよう、指導を進めた。穂先の動きと点画のつながりに気を付けて書くことは、文字を効率よく書くために欠かせない。点画から点画、線から線、文字から文字といった、筆が紙から離れた時の動きも考えさせること、「つながり」を意識して書く文字であることを意識して書くことを指導した。文字を効率よく、リズムよく書くことができること、文字の形も整う。毛筆で、つながりを意識して書くためには、途中で墨をつけ直すことをせず、言葉のひとまとまりを続けて書くことで効率のよい書き方になることを理解させる授業を行った。



■研究協議

○司会

狛江市立和泉小学校

笠井 真由子主任教諭

○記録

足立区立平野小学校

渡辺 梨沙主任教諭

○助言者

千葉大学

樋口 咲子教授

【分科会発表】

①さまざまな筆記具を生かす学習

②自ら課題をもち、主体的に解決する学習過程

の工夫
生活の中で必要に応じて使用できるように、筆記具の特性を理解できるようにした。

③自ら課題をもち、主体的に解決する学習過程
自己の課題をもてるよう自己批評を通して、じっくり考える時間をとった。解決の方法を考えるためにタブレットで書写過程を動画にとり確認する活動も取り入れた。

④学習意欲につながる評価の工夫
毛筆で学んだことは、日々の学習での硬筆で生かせるようにしたい。「あけび」をまとまって書くことでどんな良い点があるのかを考えられるようにさせた。

⑤自己評価や相互評価が行えるような書写カードを用意した。書写過程の模範DVDを映写してどんな先生でもできる授業の展開も意識した。

【自評・五年授業者】
筆記具を選択して書くことの良さを理解してもらうために、設定した本時のめあてに対して、多くの児童が筆記具の特徴を生かしてポップを書くことができていたのは成果である。

・児童自身が選択した筆記具はどのような意図で選択したのかが出来上がったポップだけからは分かりづらく、評価が難しかった。

・課題解決学習を意識した授業を展開できたことで、児童は楽しく学習に取り組んでいた。

【自評・六年授業者】
文字と文字のつながりを意識で

きていた。

・三文字の「あけび」が書きつらいのではないかと思ひ、書き初め用紙の半分の半紙(縦長の用紙)を使用した。

・見えない空中の動きを確認させるために、ペア学習を取り入れたことは良かったと思う。

【質疑応答】

・五年生の「生活に生かす」授業は、委員会活動、掲示物などに生きてくるそのものの授業としてよかった。

・キャッチコピーや大事な言葉を書く指導は今後の書道との連携を考えた上で小学校過程の中でも求めるものだろうか。

・表でまとめられていた「筆記具の特徴」は、児童から出たものなのだろうか。教師として求めたものだろうか。

・六年生の授業で、幅の狭い紙面の中に三文字を入れるのは難しいと思ったが、紙の大きさを工夫してよかった。児童の姿からそのようにしたとのことだが、紙面に書かせる時に、もう一声かけてあげるとよかった。

・授業者の「見方、考え方」の中に、明確に文字環境を整えることにより文字感覚を養うことのできる背景があると感じられた。

・書字活動という活用のシーンを常に考えて指導されていることを感じた。

・丁寧に書くことがなぜ必要なのか。それは、他人を尊重していくことなのだという明確な思いが授業者の中にあることが、授業の中

での児童の声の拾い上げ方や広げ方から伝わってくる授業だった。

■指導・講習

・高等学校の国語の中でもどう連携していくのかという視点までがもてるのが、この研究会の良いところである。

・計画がよく練られていて、これから先の学習につながるものになると思える授業であった。

【五年生の授業について】

・「千年の釘にいとむ」(光村図書)という、国語科の単元と書写の連携という点でよい授業であった。

・筆記具の特徴の表はよくまとまっていたが、現在は様々な筆記具があるので油性と水性の扱いの違いにも触れたり、用具の扱いの経験もさせたりすると更に生活に生かしていける。

・今回の内容からすると、筆記具の選択の授業展開はよかったの

で、それを使って書く(使い慣れる)ということが今後の課題である。線質が不安定になりやすい児童が多く見受けられたので、筆記具を正しくしっかり持てるようになることで、筆記具のよさを十分に生かすことができるだろう。

【六年生の授業について】

・穂先の動きを学ばせるために動画を活用していたが、動画を見る時に見る観点を示すとなおよかった。

・墨つぎもできないということでは、穂先を整えることもできない。しかし、筆先は乱れるので書きながら穂先を整えていくという高度な技法が必要である。墨が切れたか

ら書けないだけでなく、穂先が乱れたから書けないということもある。

・止めるところは止めなければならぬ。とめ、はね、はらいというのには次の始筆につながるという観点で機能的にできている。楽な運筆にする上で書字過程の中で重要な要素となる。

・硬筆でもすべてはらってしまいうまく書けない。止めることによつて速さを吸収し次にいけるようになる。

・墨つぎする時は、前の画からのつながりを意識して書くこと指導していたが、それでよい。

・穂先の向きをもう少し指導するとよかった。常に斜め四十五度から入るわけではない。かご字の練習用紙に穂先の向きがあつたので、そこをもう少し指導できるとよかった。

・たくさん練習ができたので、つながりができて言葉のまとまりがよくなった。また、硬筆の筆圧がよくなった児童が多くなつて

いた。空中のつながりについで意識が大変よくできている児童が終盤ではよく見られていた。

全体会

茨城大学 齋木久美 教授

第六十回東京大会を終えて

次年度から新学習指導要領完全実施となる小学校では様々な取り組みが行われています。他校種に

おいても、小学校書写の取り組みや動向をふまえて、今後の取り組みに生かしたいと考え実践研究を進めました。

令和元年度開催の東京大会について、報告させていただきます。

大会主題について

実社会で文字を運用する際、多くの場合、情報機器を使用しますが、情報機器を使用して文字を活用するためには、文字を書いて覚えるという学童期に習得する基礎基本が土台となっています。一方、日々の生活において、豊かな文字文化があることに気づき、自身がその担い手となつていく学習者を育成することも、書写書道教育の役割と言えます。

そこで新学習指導要領をふまえた第六十回全国大会(東京)の研究主題を「書字文化を育む書写書道教育」としました。

各校種のテーマは次のとおりです。小学校 書写の能力を高め、日常に生かす学習指導の工夫

中学校 書字文化を意識した書写の学習指導

大学 (高等学校) 高大連携と書字文化を意識して取り組む教員養成授業の工夫

新学習指導要領がめざすもの

社会の変化に対応し、主体的に学び続けようとする学習者の育成が求められています。そのためには指導者が、自身の取り組みを振り返り、学習者への支援の在り方を検討していく必要があります。文字を書くことが楽しいと実感し、文字を書くことについて主体的に知識技能を取得していこうと

する学習者を育成するとともに、指導者自身が学び続けるという意識も大切です。

また、学童期に取得した基礎基本を生かし、文字との豊かな関わりを育み、生涯学習として文字の役割について興味関心をもたせる学習指導も中学校・高等学校期には必要でしょう。校種間を超えた連携の際には、このような意識が欠かせないと考えます。

昨年七月に高等学校芸術科書道の学習指導要領解説が示され、新学習指導要領における書写・書道に関する資質・能力の育成を、幼小・中・高を通して見通せることができるようになりました。

すでに幼稚園等は平成三十年度から新しい要領や指針による実施となり、次年度令和二年度から、新小学校学習指導要領の完全実施となります。その後、中学校、高等学校での実施とつながっていく取り組みを本大会でも検討しあうことを目指しました。

さらに、新たに小学校低学年では「水書用筆等」の指導が、中学校第三学年では「身の回りの多様な表現をとおして文字文化の豊かさに触れ、効果的に文字を書くこと」の指導事項が示されました。

これらの効果的な学習方法の検討と、その成果を各校種の連携に役立てていくことも念頭におきながら授業研究を進めたいと考えました。

大会主題をふまえた授業について

今回新しく告示された学習指導要領では、既習事項に新たに獲得した知識を関連付けたり組み合わせ

せたりする過程で、実社会で生きてはたらく知識・技能を体系化させながら習得していくということも求めています。この目標の「知識・技能を体系化させながら習得」を実践するためには、学習者の実態を把握し、継続的な学習指導が欠かせません。

特に書写・書道においては、指導者自身が当該の担当学年の内容だけでなく書字に関する学習内容や文字文化について広く捉え、長期的な展望を持って授業実践することが求められており、国語科書写と芸術科書道の位置付けをふまえるならば、他校種との接続や連携を積極的にならねばならないと必要になります。

手で文字を書くことや書かれた文字に対する適否の判断といった基礎的な知識技能の習得だけでなく、社会における文字の役割も含む、手で文字を書くことが培ってきた文化についても理解させることが求められています。

小学校低学年では、基本点画とその書き方を意欲的に学ぶ学習過程と、文字を書くことが楽しい、という学習者の養成を目指し、中・高学年では、書写で習得した技能を日常生活に生かすことができる児童の育成を目指しました。

さらに教員養成の場である大学では、高大連携を意識した取り組みが必要と考え、学生に教材研究や実際の指導に生きる取り組みを

行い、その成果を検討する授業研究を異なる大学の書写書道担当者間で実施しました。

六十回大会を開催して
今大会での研究授業は小学校のみでしたが、六学年すべてで授業公開ができました。一時間に三年の授業を参観していただくのは、多少慌ただしいところもあつたかと思いますが、小学校期の発達や知的好奇心に応じ、書写学習の積み上げをどのように行っていくかについても授業を通して提示できたように思います。

中学校・高等学校の先生の参観も多く、分科会では、水書用筆等を使用した授業の在り方や水書用筆等で培う基礎基本についても、さまざまな立場の方からのご感想やご意見を寄せていただきました。手で文字を書くことの意義や文化的側面における理念を共有し、連携を目指した六十回大会の取り組みが今後につながっていくよう実践研究を推進していきたいと考えています。

指導・講評

文部科学省初等中等教育課程課教科調査官

豊口和士先生



第六十回大会（東京）が終わる

うとしていますが、皆さんご苦労様でした。授業をされた方、無事終わろうとしているなかで、いいこととそうでないことを混ぜて優しくソフトに話していくつもりです。まずは、クラスマネジメントということで見ると、来年度から新学習指導要領完全実施したことを考えてみると、かなり安定していると感じました。次への一歩を踏み出すものが欲しかった。もっと挑戦してよいと思います。

一年生では、安定した学級運営がなされていて、高い指導力を感じます。水書を使う意味とその学習の目標が合致していないのではないかと考えます。

二年生では、右利き、左利きの児童がいることを前提として書写カードを作っていました。水筆を使って水書用紙に荒々しく押し付けて書いている児童が、鉛筆で書く際に生かして書いている様子が見られました。腕を浮かして書いている児童がいましたが、全く違うものでもなかったと思います。

三年生では、この公開の時期九月に、三年生の毛筆の学習の初めに行う授業をもってきたのは、公開の時期と授業内容の時期の差に悩むことでした。

四年生では、安定した授業力をもった教師による毛筆書写の標準的な授業だったと思います。硬筆で補うということでの共有でしたが、どのような資質能力なのかを考えていくと思います。

五年生は、「伝える」ということを考えるテーマでした。学びの先に伝えるということの価値を

もたせていました。教師が児童の進度の違いに合わせて声をかけていました。「日常化」と教育課程での「生活や社会とのかかわり」を意識したところでの実感した学びとなり、生かそうという意欲を生み出す仕掛けが欲しいところでした。

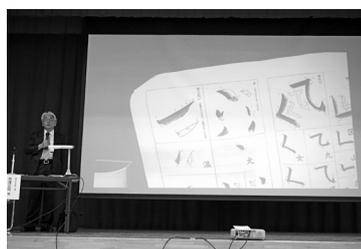
六年生は、筆圧の再生、文字と文字のつながりを知っていることが大切です。穂先の確認が必要で、筆づかいを感じさせる空書きの工夫があるとよいです。

東京の授業スタイルは、安定したスタイルとしてすでに共有されています。このことがベースとなつて、さらに新しい視点でのバージョンアップを期待します。

たとえば、①「気付き」は、気付けさせる工夫、学びを深めるための気付き、主体的な姿勢の原動力となります。②「日常化」は、「○ ○したい」と子供が実感して思える仕掛けがあるとよいです。③いかなる力を身に付けさせたいか、何ができるようになるのかを常に、生活や社会の視点で意味を考えられるとよいです。

また、発問を工夫することや、水書「すいしょ」、水書用紙「すいしょようし」等の書写用語を使えるようにしてほしい。そして、見方・考え方といった解釈が曖昧なものについては、用心して使うことが必要です。指導要領には「文字文化」と示されているので、書字文化とは何かをきちんと表す必要もあります。学習評価については、まだ示せていないが、三つの柱で評価していくこととなります。

記念講演



新学習指導要領に基づいた書写書道教育

山梨大学大学院教育学研究科

特任教授 宮澤正明先生

1 学習指導要領改訂のポイント
「書写」は「国語科」の普遍的学習内容であり、手で字を書くことがどれだけ大事であるかを喧伝しなければならぬ時期にきていると思います。今回の改訂で「書写」は、「知識・技能」の枠組みに入りました。これまでの「書写」は、書くという「技能」が優先されてきた気がします。しかし、手で字を書くことが知識の総和であることを考えれば、「書写」は常に、「知識」と「技能」とが折り重なって学習されるように指導していかなければならないと思います。

2 新学習指導要領小・中学校「国語科書写」解説

「書写」を「担当される先生方には、新学習指導要領の解説をしつかり読み込んでいただきたい」と思います。小学校低学年では、従来の「文字の形に注意して書くこと」に、「点画や」という言葉が加わっています。

3 点画の種類と書き方

基本点画とは最大公約数的なもので、その種類は解説に説明されています。さて、めあてを「画間」とした、毛筆を使った授業を参観したときのことでした。ある子供が点画の太さを一定にできないために画間を等しくできませんでした。先生が子供の躓いているところに早く気づいて、「筆を立ててごらん。始筆で一度筆を止めて、弾力を感じてから横にスーと動かしてごらん。同じ太さで書けるよ。」と言ってあげていたら、その子供は悩まなくてすんだでしょう。点画がしつかり書けると字形が整ってきます。字形指導のときに、点画を抽出して練習するのもよいでしょう。

4 右上払いの意義

ほとんどの漢字では、単独形の最後に書かれる横画が偏になったとき、右上払いに変化します。右上払いであることで、その部分は偏であることを示しているわけです。もし、土偏の最終画を横画に書いてしまったら、横書きの場合、土也(つちなり)、と読めてしまう可能性があります。「右上払い」は重要な点画なのです。

5 水書用筆による指導の意義

学習指導要領の解説には、点画の練習を水書用筆で行うことが示唆されています。どう使ったらよいのか、また、どのタイミングで使ったらよいのか、そして何を目的に使うのか、完全実施にむけて研究されていると思います。書写は形を真似るものではないと思います。字形を生み出す点画の書き方、そしてそれをどう効率よくリズムカルに書いていくか、これを学んでいくのが今度の学習指導要領の趣旨だと思います。「はねはこのくらいの長さでどの方向を向いて」と、形で捉えるのではなく、次の画との関係においてはねがあるということ、子供たちにはぜひ感じ取っていただきたいと思っています。

6 これからの書写の授業を考える

従来の書写の授業には、全員前を向いた一斉指導のみの学習形態で、手本をよく見て書きなさいー子どもたちからすると、手本を真似て「山」という文字を書いたよーという、書写本来の授業とはかけはなれたものもありました。これからの書写の授業では、何種類かの書字例を見せるなどして、「どの『山』が整って見えるかな、それはどうしてかな」と問いかけて、思考力・判断力を発揮させることが大切です。グループ学習を取り入れるのもよいです。その時に、書写用語を共有できると、学習活動の深まりにつながります。小学校の授業ではよく、バランスという言葉が飛び交います。具体性のない、抽象的な言葉を使っている、具体的にどのバランスがいいのか共有できないまま終わってしまします。また、自己評価だけでなく、積極的に他者に評価を求めることも大切です。こうしたことが授業でおこなわれると、子どもたちの主体的、対話的で深い学びにつながります。書字動作を見合うのもよいでしょう。先生が、「山」という字と同じ要素のある文字を探してみよう」と授業を展開していくと、学習が発展していきます。さらに、自分の言葉を書くようにすると、言葉と書写というものが一体化して日常化が図れると思います。自分の言葉や考えを、書写で学んだことを生かして書く、言語との関連を強くもつていくという書写の授業を展開していただきたいと思っています。

7 児童・生徒が「文字文化」に

関心・意欲を持つための方法と工夫

学校教育を通して、手書きの伝統文化を理解し継承するための提案をいたします。まず、書き文字による環境を整えていただきたいと思っています。教師の板書への高い意識、手書きによる掲示物の整備といったことです。つぎに、文字指導と書字指導とで密接な関連を図っていただきたいと思っています。漢字指導(字体指導)と書写指導(字形指導)との区別を明確にするとともに、関連指導(文字指導では書写指導の内容を取り込み、書写指導では単に技能のみならず学習課題の「文字・言葉・文」の

内容も加味)にも考慮する必要があります。さらに、文字文化に気づかせるようにしていただきたいと思っています。用具・用材の知識、文字の歴史、字体・字形・書体・書風の区別、書の古典に見る漢字や仮名の名品鑑賞、本のタイトルや仮名の日常生活中的の毛筆文字の効果、明朝体と書き文字の違い、などの視点から考えさせるとよいでしょう。これらを実現するためには、用具用材を常備する「書写教室」(多目的に活用する教室でも可)の設置、教師の書き文字への意識改革、子供の文字を相對評価しない、保護者の書き文字への感心を高める、といったことも大切になります。書写の学習は、自分のため、記録のため、という事務的なところに特化されてきた気がします。もっとぬくもりのある学習ということであるならば、他者の心に届く文字を書くために文字を練習する、他者との関係において美しい文字を書く、という学習目的であってもよいと思います。日本中の子供たちのために、さらなる書写の授業の工夫をお願いいたします。

東京大会を終えて

大会実行委員長 加藤 泰弘



第六十回大会(東京)は、「書字文化を育む書写書道教育」の大会主題のもと、東京都葛飾区地域産業振興会館及び葛飾区立中戸小学校を会場にして開催されました。本大会に全国各地から二〇〇名を超える参加者がありました。ご参集賜りました方々に對しまして、あらためて深く御礼を申し上げます。また、本大会の開催に当たり、授業公開を担当された先生方、会場校の先生方、運営にあたられました皆様に、心から感謝申し上げます。

昨年度の第五十九回大会(北海道)は、北海道胆振東部地震により、札幌での開催中止を余儀なくされました。その成果につきましては、少しでも多くの方々に伝わるよう、本大会の大会誌にも掲載させていただきます。

本全国大会の開催に当たりましては、文部科学省をはじめ東京都教育委員会、葛飾区教育委員会等、多くの諸機関からのご支援を賜りました。特に文部科学省初等中等教育局教育課程教科調査官の豊口和士先生からは、本会報に記載の通り、大会全体の指導講習をいただき、今後の書写書道教育の方向性や授業の充実・改善の視点について、大きな示唆を賜りました。

平成二十九年三月に告示された小学校学習指導要領は、来年度からいよいよ完全実施となります。今回の改訂では、各教科等で育成を目指す資質・能力を「知識

及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱で整理されました。また、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの不断の学習過程の改善が求められているとこ

ろです。
新しい学習指導要領において、国語科書写は、「知識及び技能」の中の「我が国の言語文化に関する事項」に位置付けられました。小学校では、低学年の指導事項に「点画の書き方」が新設され、「内容の取扱い」には「適切に運筆する能力の向上」、解説には「水書用筆等を使用した運筆指導」示されたところでは、これは、中学年の「筆圧」、高学年の「穂先の動き」「点画のつながり」と併せて、小学校全体で、書写過程に視点をあてた指導の一貫性が図られました。本大会では、その改訂の方向をふまえて、全ての学年にわたる六つの公開授業を行い、現行の学習指導要領で行ってきたこれまでの成果を発信することができ、分科会においても、活発な議論が展開されました。また、宮澤正明先生（山梨大学大学院教授）による記念講演では、より具体的な今後の書写指導の在り方を示していただきました。

本大会を一つの契機として、書写・書道教育の実践研究の充実が図られ、また、来年度の第六十一回大会では、一層の授業の充実、新たな提案へとつながりますことを祈念し報告と致します。

**水書用筆等を活用した
書写指導法研修会**
(略称 水書指導研修会) について
全書研事務局 高島一広

平成三十年度に始まった水書指導研修会は、昨年度、東京都、大阪府、埼玉県、北海道の四か所で開催し約三八〇名が受講しました。そして今年度は五か所で開催し、東京都約一〇〇名、福島県約一〇〇名、岩手県約五〇名、福岡県約一〇〇名、愛知県約一〇〇名の計約四五〇名の方が受講しました。

講師はすべて書写書道教育推進協議会から派遣され、DVDを活用してどの会場も同じ内容で行われました。

受講者には、中学校・高等学校・大学の先生方や書塾の先生をはじめとする書道関係者、報道関係者、教科書会社の方々も多く含まれています。

これも、書写書道に関わる方々が、今回の水書用筆を使用した運筆指導に多大な関心を寄せている証左かもしれません。

その一方で、小学校の先生方の受講者の割合が低いことも事実です。二〇二〇年度から全面实施される小学校の指導要領では、「特別の教科である道徳」の導入、外国語の教科化と増時数等への対応が優先されていて、小学校低学年の国語科書写の内容への対応は遅れているというのが実態です。

全国には約二〇〇〇校の小学

校があります。その数倍の先生方が来年度、小学校一・二年生の担任になるわけです。少なくとも各校一名以上の先生方が、本研修会を受講されるか、本研修会を受講された方からの伝達研修を受けるかしていただき、正しく水書用筆を使う意義を理解していただかないと、たくさんさんの誤解に基づいた指導がなされかねません。

「毛筆指導の前倒しだろう」とか「三年生以上の毛筆も水書でいい」とかの間違った解釈がされ、硬筆のための毛筆、運筆指導のための水書用筆の活用という根本的な目的がないがしろになってしまいう危険を孕んでいます。

これまで、全書研では、書写書道教育推進協議会の水書研修会の活動に全面的に協力し、積極的に講師派遣に応じたり、開催の相談に乗ったりしています。令和二年度の水書指導研修会への応募は、令和二年二月末現在、まだないそうです。

これからでも間に合います。ぜひ書写書道教育推進協議会のホームページへアクセスし、開催の応募をしていただきたいと思います。

全書研では、今後も、さらに水書指導研修会を通して先生方への啓発活動を行っていく予定です。最後になりましたが、この研修会を開催するにあたり、全国書道用品生産連盟の皆様には、この二年間、研修用の水書用筆等や水書用紙、筆ならしなどを無償でご提供いただきました。衷心より感謝申し上げます。

全日本書写書道教育研究会 第61回全国大会 (神奈川)

日程 令和3年2月19日(金) 20日(土)
会場 横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校 (授業公開)
〒248-0005 神奈川県鎌倉市雪ノ下3-5-10
鎌倉女子大学 大船キャンパス (大会・レセプションパーティー)
〒247-8512 神奈川県鎌倉市大船6-1-3

大会長 (全書研理事長) 長野 秀章
大会運営委員長 青山 浩之
大会事務局長 杉山 勇人

大会事務局 江戸川区立南小岩第二小学校校長 土上智子
〒133-0056 東京都江戸川区南小岩2-16-1
Tel 03-3657-0257 Fax 03-3658-4513